

き っ かけ

村田修子

ある一つのことに興味をもってやる、今迄とは違ったことをする、とか、何か新しいことを始める、という状態を考えてみますと、必ずそうなるべき動機があったとか、きっかけがあるものです。

「どうしてそうなったの？」というように聞くと「成りゆきでなんとなく」とことはではそういう人も多いのですが、それにしても意識はしないまでも、何等かのきっかけはあるものです。

ちなみに自分のことを振り返ってみますと、何故自分は幼児の中で生活するようになったのかしら、と不思議になることがあります。

スポーツが何よりも好きだったので、陸上競技のコーチになって若い有能な人を見つけ出して指導し、オリンピック

選手に……等と想っていた自分が、全然方向の違う仕事に長い間たずさわっていることは、生涯に一度しか通ることのできない道を歩くにしては余りにも違う状態になっていることは、何といても不思議な気がするのです。これについてもやはりきっかけがあるのです。

戦時中の無理がたたって身体をこわして静養していたとき、再就職の場として師範学校と、幼稚園の話が同時にありました。私としては幼児の世界は全然経験のないところでしたが、師範学校の教師になることはどうしても気が進まなかったからにはかならないのです。これは全く勝手な推測だったのかも知れませんが、師範学校の生徒は生まじめ一本やりで笑う余裕もゆとりもない毎時間のような気がしたので、といて幼稚園の仕事に自信があったわけではないのですが師範の固い感じよりはすくわれるように思いました。ですから、師範学校ではなく高校や中学の話であったとしたら必ずしも幼稚園にはきていかなかったのではないかと思えます、人間の運命は思わぬことが方向づけがされるものだと思わずにはいられません。

それにもう一つ決定的なことは学生時代にそのお講義を興味をもって伺った倉橋先生が園長でいらっしやることでし

た。

そんなきっかけでいま自分がこうしていることを考えますと、運命の数奇さひとしお、というところですか。

こういう思い出話はさておきまして、きっかけについて最近感じたことがあります。

外国の人は社会人になっても、学生時代にしていた運動を続けるとか、社会に出てからなお一層運動不足を補うためにいろいろな運動を始めることが多いようですし、またそれをすると思うと容易に運動のできる場所が完備しているのです。

日本でも最近各地にアスレチック・クラブが誕生し、水泳に体操にテニスにと、昔は一番忙しく仕事に追いまくられていた女性が多く参加しているようです。ときには子どもたちを園にあずけ、その間の時間を利用して例さえ聞きます。また母と子の教室、と銘うって、その関係を持たせた扱いをしている場合も多いようです。

ここではこれ等の是非を論ずる、ということではなく、それと同じように今流行のフィールド・アスレチックという、鍛錬するためのいろいろの施設、簡単に言ってみますと障害物競争のようなものですが、それをしつらえられたところへ

出向いて行ってやっている様子をテレビで見たとき、今昔の感にたえなかつたのと、これもきっかけだ、と思ったのです。

昔、乗物が発達していなかったときは歩くことが当然でしたし、ぶらさがる、よじのぼる、ころがる、這う、とぶ、などということは身近なこととして、特別な意識をしなくてもやっていました。それが環境の変化で簡単にできなくなった現在ではこういう場が不自然ながらも作られて、こういう運動が必要だと意識した人間がやりに行くわけです。

こういうように変わってきてしまった感慨とこういう設備というきっかけがないと仲々実行できない人間の弱さを感じたのです。

新しい子どもたちを迎える四月は、新しい環境に対して不安そうにしている子どもたちを一日も早く楽しいところとしようようにさせ、しあわせに満ちた顔にすることが必要です。そのためにはいろいろな場でのさまざまなきっかけがたくさんあることを心に刻みこみ、それをとらえて有効に生かしたいものだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)